

# 時間作品, 時間価値, 時間享受 (VI)

武井勇四郎

序

第1章 運搬される時間情景

(第1節 モノの時間 第2節 コトの時間 第3節 虚構の時間)  
(以上, 第17巻第3号まで)

第2章 モノとコト

第1節 時間的对象とその位相 (前号)

第2節 時間質と展相質 (本号)

第3節 コトの諸相

## 第2章 モノとコト

### 第2節 時間質と展相質

物的対象に広さ, 体積, 重量, 密度, 強度, 形態, 色彩等々が固有の質であるように, 時間的对象にもそれ固有の多くの質が見受けられる。時間質として以下のものが目立つ。

I 時相質

II 機能質

III 間隔質, 単位質, 変化質, 密度質, 状態質, 速度質, 進捗質, 継起質, 周期質, 方向質, 緊急質, 適時質, 組織質, 層序質

IV 展相質

これらの時間質の抽出と四つの分類が適切であるかどうかは今後の残され

た研究課題であるが、分類について言うなら、Iは現在、過去、未来の存在性格上の質であり、IIは客観的因果的作用、間主観的言語的作用、主観的志向的作用の三つの作用性格上の質であり、IIIとIVは形相上の質である。特にIVは初位相から終位相までの全体的な推移形態の質である。IIの機能質上の相違は、モノ的時間とコト的時間、実在的時間と虚構の時間のすべての時間形態にこれらの時間質の適用を許していると思われる。つまり天体的物理的時間から、人為的に組織された時間（暦、社会的労働時間、音楽、文芸作品、スポーツ等々）、心中の意識的情緒の流れにまで適用可能と思われる。IIIの形相上の時間質について言えばそれぞれの質間には依存、派生、結合、上位下位の連関等があり複雑な関係がある。IVの展相質はIIIのいくつかの質の上位複合体である。

以下、それぞれの時間質に若干の説明を加えて、その質性格を日常言語で表現しておく。

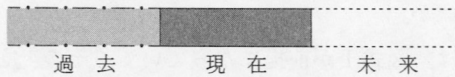
## I 時相質

ドイツ語文法に“Zeitwort”があり、日本語文法の「動詞」に相当している。これは〈時間詞〉とでも訳すことになろうか。またポーランド語文法では“czasownik” (czas—時間, słownik—語)が“rzeczownik” (rzecz—物)に対置されている。後者は日本語文法の「名詞」に相当するが〈事物詞〉とでも訳すことになろうか。ともあれポーランド語文法にあっては〈モノ〉の詞と〈トキ〉の詞の対峙が目立つ。換言すれば〈事物詞〉が物的対象の、〈時間詞〉が時間的对象の言語的表現と見る思考様式がうかがわれる。

欧米のおおかたの文法書では動作、作用の詞は時制 (Tense—ラテン語の時を意味する *tenpus* に由来する) と相 (様態 Aspect) の二面から研究され、前者は現在、過去、未来の三つの時制を、後者は動作の進行、継続、完了、結果、状態、反復、習慣、始動終動等の相貌を指している。ここで言う時相質とは文法上の Tense と見て差支えないが、II, III, IVのタイプの時

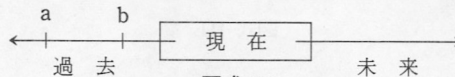
間質は文法上の Aspect に若干見出し得るがそれに尽きない。

もし文法学者が現在，過去，未来の三時制の替りに，意識の働きにひきつけて，それぞれを直接表象（直観直叙），回想（回想叙述），設想（想像叙述）とするなら，われわれはこの見解から即刻離れなければならない。というのはここで言う時相質とは現実存在，過去存在，未来存在の存在論上の性格のものであるからである。存在性格から特徴づけるなら，現実存在は活動的であり（あるいは活動の中にあり），過去存在は活動性を脱しており，未来存在は未だ活動していないのである（あるいは活動可能的である）。この存在性格からすれば，多くの論者が主張している如く過去存在と未来存在は非対称的であり同じ在り方をしていない。またこの存在性格からすれば過去存在や未来存在が存在の基盤（原存在）になり得ず，それはあくまでも現実存在である。このことは「動詞」の文法形式にも表現されている。まず現在不定形があってしかる後にその過去形と未来形が形成されている。現在，過去，未来の三者の存在構造を図化するなら



図式 I

となり，現在は未来と過去の間の中央に位置している存在構造をもつ。時の流れの向きが過去→現在→未来なのか，過去←現在←未来なのかは不問にして，この存在構造は文法的にも表現されて，現在から過去へ，現在から未来への視線がある。図化すると



図式 II

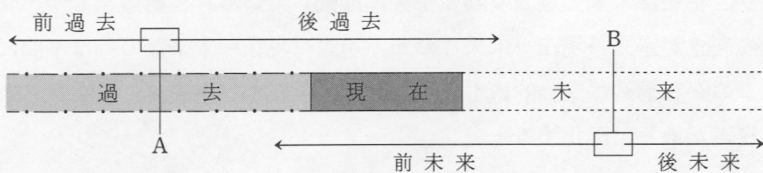
となる。文法上の過去完了形，過去形，現在完了形，現在進行形，未来完了形，未来形等の形式には，現在に我が身を置いてそこからの過去や未来への遠近の視線がある。例えばある事象が a から b まで継続した場合なら，そ

の事象は a から b への流れの方向を示すが、それには現在から見た a 時点と b 時点の遠近が前提されているのである。現在の中にも遠近があることは現在完了形や現在進行形の存在によって知り得る。この意味でも現在が幾何学的点でないことが暗示されていよう（ドイツ語に現在進行形がないことや現在完了形が過去の意味と同じであることは、現在が幅のない幾何学的点であることを意味しない）。

英語の文法に Before-past（前過去）、After-past（後過去）、フランス語に Futur dans le passé（過去の中の未来）等の形式がある。日本語で表現すると以下のようになる。

- 1) 前過去「丁度一カ月前の今日、五年間書きためた原稿を焼き捨てた。」
- 2) 後過去「昨年の同窓会の席で三年後に再び行なうことが決った。」
- 3) 前未来「来月、一年がかりの仕事が終了するので、その時点で一杯飲もう。」
- 4) 後未来「来週の今日、こちらに来てもらって、直接相談した上で出かけようではないか。」

この四つの表現は、図式 I が前提になっていて、その上を図式 II が移動すると見られる。図化すると以下のものとなる。



図式 III

1) と 2) の文は A 時点に遠近視線の原点をおき、3) と 4) は B 時点にその原点をおいている。2) の文が現在時点で発話されているなら、この同窓会はまだ未来のことである。従って後過去は過去や現在内に収まるとは限らず未来にまで伸び得る。同じことは 3) の前未来の文にも言える。しかし前過去

は過去内に後未来は未来に収まることになる。遠近視線の原点がどのように移動しようとも、現実存在が過去存在と未来存在との中央に挟まれる存在構造は少しも崩れず、むしろ移動する遠近視線の原型となっている。図式Iと図式IIとが相関的に似かよった構造をもつことに止目するなら、現在が原存在や視座として過去や未来に対してゆるぎない位置を占めていることは疑いの余地がない。日本語の<sup>今</sup>今日、<sup>今</sup>今年、<sup>今</sup>今月、<sup>前</sup>前年、<sup>先</sup>先年、<sup>前</sup>前代、<sup>前</sup>前妻、<sup>来</sup>来年、<sup>将</sup>将来、<sup>後</sup>後日、<sup>後</sup>後手、<sup>最</sup>最後、<sup>現</sup>現今、<sup>現</sup>現代、<sup>現</sup>現世、<sup>過</sup>過日、<sup>去</sup>去年とかの「今」「前」「後」「来」「現」「過」「去」の用法は、現在や今に基点を置いて前後関係で捉えられるか、〈過去→現在→未来〉の方向か〈過去←現在←未来〉の方向の流れで捉えられるかしている。英語の“before”と“after”，“last”と“next”の表現様式と日本語の「前」，「後」，「来」等の表現様式は、図式IIIにおいて遠近視線の向きと時間の流れの向きとがどのように捉えられるかにかかっているようである。ここでこの問題に深入りすることは出来ないので、いずれ機を見て考察したい。

時相質については以下の日常言語の表現がある。

現在：目下の、今の、現下の、現時点の、現実の、現前の、生起中の、進行中の、現世の、現今の、等。

過去：昔の、以前の、過ぎ去った、既在の、完了した、終了した、歴史的な、末世の、等。

未来：将来の、これから先の、前途の、先き行きの、先物の、来世の、等。

## II 機能質

働きとか作用の質とかと別言してもよい。日本語文法の「動詞」という表現は、“Verb”（言葉の中で最も重要な語の意味）とか“Zeitwort”と違って、端的にこの機能質を指し示している。つまり「動詞」は動作主の活動性一般を表現する詞のことであり、時間質の一つとして機能質が存在すること

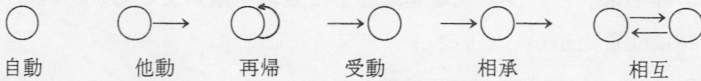
を裏付けていよう。爾来、文法では動詞を自動と他動、能動と受動、使役、再帰、相互等の別で研究されてきたが、作用性格の違いには注目されていない。人が手で相手を〈なぐる〉なら、彼の行為は実的に相手に及んでいる。なぐられて痛ければ、なぐる行為は原因で痛さは結果である。これに対して彼が相手に「なぐるぞ！」と叫ぶ場合、彼の手の行為は実的に及ばない。その言葉のもつ意味作用が相手によって了解されるだけである。これに対して彼が頭の中で相手を〈なぐる〉さまを想い描いているなら、この作用は純粹に志向的である。このように同じ他動詞“なぐる”でも作用性格の違いが歴然としている。従って機能質を三つの部類に分けることが出来る。

- 1) 客観的因果的作用：力学的、機械的、エネルギー的、行動的、運動的、物理化学的、等。
- 2) 間主観的言語的作用：記号的、シンボルの、信号的、情動的、指示的、意味的、身振りの、約束的、命令的、等。
- 3) 主観的志向的作用：想像的、空想的、思念的、情意的、回想的、期待的、夢想的、思考的、等。

もしこの作用性格の相違を見落すなら、時間的対象の多様な面貌は失われ、物理的時間にすべてを還元するか、心中の時間性にすべてを還元するかする還元主義が幅をきかすことになる。そうなればまた時間の階梯構造も入れ子構造も不要となろう。すると時間の面貌はますます貧相となろう。

作用性格の相違を踏まえた上で従来の動詞の文法的機能が検討される必要があろう。従来、動作方向の有無、動作方向の性質によって、自動と他動、能動と受動、使役、再帰、相互の区別がなされてきた。しかし、作用を受けて同じ作用を次に伝えるか、作用に変容を加えて次に伝えるという相承ないし継続作用は時間的対象の形成にとって非常に大きな役割を果している。受けた作用を間髪入れずにすぐ次に伝える場合もあれば、一定期間持続した後には伝達するものもある。例えば蓄電器がそうであり、文中の一文がかなり後続の文に意味作用を及ぼす場合などがそうである。

基本的には以下の図の六つが考えられる。



以下のそれぞれの言語表現がある。

自動：自発的, 自産的, 自力的, 自活的, 自足的, 自決的, 自律的, 自主的, 自因的, 等。

他動：他律的, 他力的, 動機的, 条件的, 影響的, 能動的, 能因的, 強要的, 強制的, 使役的, 原因的, 等。

再帰：反省的, 自殺的, 自繩自縛的, 自画自讚的, 自受的, 自薦的, 自慢的, 自重的, 等。

受動：受容的, 受身的, 反応的, 感受的, 結果的, 承前の, 等。

相承：継承的, 受け渡し, 取りつぎ, 継続的, 変換的, 相伝的, 伝達の, 遺伝的, 言付けの, 伝来の, 等。

相互：相乗的, 相殺的, 相打ちの, 相思相愛の, 相剋的, 葛藤的, 相助的, 相關的, 等。

### IIIa 間隔質

もし世界のすべての出来事が $t_1$ という時点で生起し, その後すべて全く同じままで持続しているなら梁間を設定するすべは全くないであろう。一枚の写真のようなすべて同時的事象となろう。そこには時の経過は存在しないだろう。時点 $t_1$ に出来事 $E_1$ が起り, 別の出来事 $E_2$ がその後が生じるなら時点 $t_2$ を設けることが出来よう。 $t_1$ から $t_2$ までの間隔が何億分の一秒であるか何億光年であるかはどうでもよいことである。ともかく,  $E_1$ と $E_2$ は同時に生起していないのである。間隔は一般に相対的であり, 巨視的立場に立てばかなりの間隔も一瞬となるし, 一瞬も微視的立場では諸々の位相をもつ過程となる。現在という間隔幅も立場によって現世, 現代, 今年, 今日, 今,

今の今といった具合に伸縮自在であり、日常生活では間隔を厳密に限定しないで「一昨年来」というような漠然とした表現を用いている。それは次に述べる時間単位質にかかっている。

間隔質については以下の表現が目立つ。

期間の、時期の、時代の、期限づきの、……以来の、……までの、過渡期の、長期の、短期の、一時期の、一時的な、束の間の、一瞬の、刹那的な、悠久の、久遠の、無窮の、永遠の、無限の、等。

### IIIb 単位質

時間単位質は間隔質の派生体である。時間の測度単位には、当初、天文学的周期現象（四季、昼夜、月の朔望等）が選ばれ、後に人為的に細分化され、現行の時計の時分秒となっている。単位は約束上成立し、厳密な単位を自然現象にのみ求めることは出来ない。現行の協定世界時 UTC は世界中の研究所にある原子時計の一秒の平均を一秒と見做すと約束している。

日常的な時間単位は非常におおまかであるが、自然現象の研究などでは超精密な単位が要求される。測定基点をどこにおくかによって時間経過単位が出来る（紀元前 100 年とか、五世紀、一昨日来とか明後日までとか）。時刻はそれぞれの単位による刻みに外ならない（暦の何年何月何時何分等）。

次の表現が目につく。

一秒の、一分の、一時間の、一日の、一週間の、一カ月の、一年の、二年おきの、十年の、一世紀の、光年の、一世代の、単年度の、午前の、昼間の、夜中の、幼児期の、学校時代の、地質時代の、前世紀の、等。

### IIIc 変化質

時間とは出来事、事物、状態の変化であると言われるほど、変化は時間にとって本質的な性質である。

変るものが何であるか（質料）に応じて多種多様な表現が用いられてい



る。

変動的，変形的，変移的，変身的，変貌的，変質的，変量的，変数的，変心的，変態的，変調的，変速的，変則的，変革的，変遷的，変異的，変節的，変位的，変項的，変換的，翻訳的，変転的，等。

また変化質は他の時間質と相俟って，表現の変容が派生する。

激変の，めまぐるしい，一変の，豹変の，突発的な，順調な，劇的な，規則正しい，段階的，継続的，非連続的，秩序のある，等。

### III d 速度質

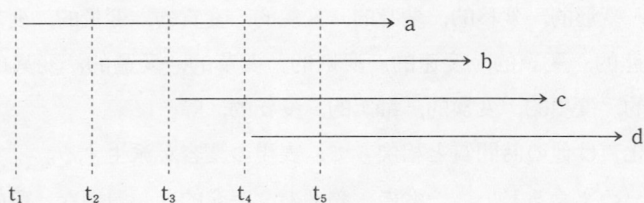
速度は時間と距離との関数である故，時間とかかわりをもつが，更に時間との関数ともなれば加速度となる。単位時間内における事象生起の頻度や変化の度合は速度質となる。音楽における Tempo に Largo, Adagio, Allegro, Presto 等の速度記号があるが，それは絶対的速度ではなく，Adagio ならメトロノームによる一分間における 1/4 音符の 100~120 拍で決まる。速い，遅いは相対的で比較上のもので絶対的な速さとか絶対的な遅さとかはない。一週間で同じ分量の本を一冊読む人は二冊読む人より遅い，後者は三冊読む人より遅いといった風である。

のろのろした，ゆっくりした，遅い，緩慢な，ゆるやかな，急速の，高速の，特急の，加速的な，促進的な，拍車をかけた，等。

### III e 密度質

物体の密度質とまぎらわしいが，時間の密度質は次の事例からはっきりしよう。a, b, c, d の並進的な持続事象があって，時間の単位間隔がすべて同じなら， $t_4 \sim t_5$  の事象の密度は， $t_2 \sim t_3$  のそれより高いことは明らかである。音楽の多声和音はまさしく密度質を表現している。四季の開花を引き合いに

出すなら四月は七月よりも多種多様な花が重なり咲いて、文字通り百花繚乱である。



多声的な、多彩的な、多様な、集約的な、飽和的な、過飽和的な、圧縮的な、犇めき合った、

単声的な、単色的な、散漫な、水で薄めたような、まばらな、弛緩した、空っぽの、等。

### III f 状態質

一定期間、ある事物がその性質や形態や運動等の点で同じままで持続するか保持される場合である。状態質は無活動のことを言うのではなく、運動状態、興奮状態、戦争状態というように、ある活動が同じままである場合にも言える。もし車輪が位置の移動もなく、そして加速も減速されることなくくると一定期間回転しているなら、これは回転状態と言えるが、回転過程とは言えない。何故ならば過程は諸々の異質の位相から構成されているからである。回転状態の場合、位相は一つしかない。この回転状態を一様な過程という表現を用いるなら、これは厳密でなくむしろ一様な経過と言うべきであろう。「一様な」というのは「変化」との対比で述べられているから、持続状態と表現してもよい。

慣性的、惰性的、恒常的、慢性的、均衡的、平衡的、安定的、定常的、常数的、足踏みの、膠着した、沈滞した、渋滞した、淀んだ、高原的な、等。

## IIIg 進 捗 質

一定期間内で予定された過程を実現する場合, 目下どこまで進行しているかのはかどり具合である。別言すれば, 過程のどの位相まで来ているかである。事が順調に運んでいるなら立ち遅れることはないが, 進行がはかどっていないなら, 進行速度を速めることになる。この点で進捗質は速度質と深い関係にある。計画達成においてこの質は大きな役割を果す。

早熟とか晩熟, 早稲とか晩稲という現象は, ある事象と他の事象との比較上の進捗であって, 同一事象の進捗度ではない。後者の場合は完熟に対して未熟, 完成に対して未完ということになる。

肯定的表現と否定的表現が目立つ。

捗る, うまく進む, うまく運ぶ, 順調に行く, 早熟の, 進歩的な, 進取的な, 早老の, 等。

遅れている, 手間どる, もたもたする, 手こずる, 晩熟の, 晩成の, 保守的な, 時代遅れ, 乗り遅れ, 等。

## IIIh 継 起 質

今, 30 秒おきに一秒間同じ音階音を発するなら  $\bar{t}_1$   $\bar{t}_2$   $\bar{t}_3$   $\bar{t}_4$  となる。同じ音階音であるから  $t_1$  の音も  $t_3$  の音も全く区別がつかない。違いは  $t_1$  の音は  $t_3$  の音よりも二つ前に鳴ったということのみである。 $t_2$  の音は直前に鳴ったということになる。それ以外にこの同じ音を区別する策がない。ここに時系列が事象を規定する所以がある。 $t_3$  の時点で同時に音階音をいくつか発するなら, それらを区別するものは空間的方位しかない(左右, 前後, 高低)。ここに空間配列が事象を規定する所以がある。しかし,  $t_3$  のそれらの方位を異にした音も  $t_4$  の音よりも前に鳴ったという規定を受けざるを得ない。何故ならば  $t_4$  で同じ空間配置で鳴らすなら,  $t_3$  と  $t_4$  とには空間配置の違いは認められないからである。この点で, こうも言ってよければ, 時間系列は空間配列よりも基本的な規定者の風格があるように見える。

この時系列が直線的であるか曲線的であるか、また先行事象と後続事象が因果関係をもつか否かは別として、 $t_1, t_2, t_3, t_4$ に起る事象の継起順序が、前後、先後の空間的視座の表象で把握されるか表現されている。 $t_2$ の事象 $E_2$ は $t_3$ の事象 $E_3$ より「前」であり、 $t_3$ のそれは $t_2$ のそれより「後」にあり、そして視座の移動によって「前」「後」は相対的なものとなる。 $E_3$ は $E_2$ より「後」であるが、 $E_4$ より「前」となる。時間系列は空間配列よりも「基本的な規定者」であるのに、妙なことに言語表現上、空間配列に負けてしまうようである。つまり、継起順序が前後関係で置き換えられる傾向が強い。この場合等閑に付されるのがIの時相質である。 $t_3$ が現時点なら $E_2$ は既に過ぎ去った事象であり、 $E_4$ は未だ生起していない事象であることが忘れられてしまう。ベルグソンが時間を空間化してはならないと警告し続けたのはこの点である。

しかし、「前」と「後」の関係で捉えるのも根拠がないわけではない。先着順の行列について考えてみよう。A, B, C, Dなる人が $t_1, t_2, t_3, t_4$ に到着したなら、 $\begin{matrix} A & B & C & D \\ t_1 & t_2 & t_3 & t_4 \end{matrix}$ と並ぶことになる。Aの到着という出来事は、Bのそれより時間的に先である。到着という出来事は出来事であって〈モノ〉ではない。もし、到着という出来事だけが問題となるなら、A, B, …なる人(者)はそこにとどまる必要はなく、受け付け順のように人はどこかへ流れて行けばよい。ところが先着行列の場合は、到着という出来事に続いて、その人が〈者〉としてその場に持続することが必要である。先きに来た人Aは後から来た人Bよりも $t_1 \sim t_2$ の時間間隔の分だけ、その場に持続する(あるいは待つ)ことになる。持続性を図化するなら右

D・

C———

B———

A———

$t_1 \quad t_2 \quad t_3 \quad t_4$

の図式となる。しかし、行列は明らかに空間的配列であって、〈モノ〉の配置(線条的配置)をとる。この〈モノ〉が人という〈者〉であるため、そこに視線方向上の視点がうまれ、Bの眼前にAがいてその背後にC, Dがいることになる。ここに時間的に早く到着したという出来事が〈者〉としてBの「前」にある

ことと同じ意味をもたされる。妙な言いかたになるが、〈者〉が早く到着したという出来事を消さないでいつまでも持続させる、つまりAの到着という出来事は $t_2$ の時点では既に過ぎ去っているが、それを $t_2$ 以降にとどめるには到着〈者〉がそこに立ち続けて、早く着いたことの証とするしかない。たとえ通し番号札をもらって待ち時間を人が有効に使う場合でも、通し番号札が今度は〈物〉として到着という出来事の証となる。通し番号の1, 2, 3, 4が $t_1, t_2, t_3, t_4$ における出来事と対応しているのである。

通し番号札に注目してみよう。この通し番号札の通し番号そのものは一種の記号の系列であって少しも出来事の系列ではない。先着順に並ぶ人が一致して約束言の上で通し番号が到着順であることに合意しなければ意味をもたないのである。まさしく番号札はIIの機能質の中の間主観的言語的作用しか有していない。しかし、1, 2, 3, 4の通し番号の数値順序は決してデタラメで恣意的ではなく、数世界の中でしかるべき位置づけをもっている。3は $(1+1+1)$ であって2 $(1+1)$ より大きく、4 $(1+1+1+1)$ より小さい。この大小関係は前後関係に置換される。

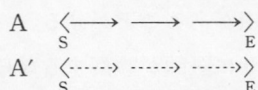
ともあれ以上のような事を考えると生起事象の順序を「前」と「後」で表現するには少なからぬ理由があることが分る。

今度はこの通し番号札通りに医師が診察するなら、到着順序に合せて行なっていることになる。通し番号の数系列が到着順序に対応しているからである。医師のこのような診察順序はプログラム順行ということになる。このような継起事象は日常生活の中に多種多様にして沢山ある。プログラム順行は人為的な約束言の上で成立するもので因果関係系列とは全く無関係である。IIの機能質の中の間主観的言語的作用が大きな役割を果しているのである。

継起の連続性と非連続性について若干触れておく必要があろう。既にチョウの一生を事例として述べたように、生物の場合、過程を構成する諸々の位相は連続的である。位相の中断は死を意味する。四百米リレー競走にあって、走者が入れ代っても、スタートからゴールまでの競走は連続的である。

将棋の勝負にあってはどうか。一見して対局者が先手後手交互に指すので離散的に見えるが、しかし、盤面上に繰り展げられている戦況の棋移は連続的である。対局者の考慮時間の大小は棋移には少しも関係がない。これに対して文芸作品の諸々の文は連綿と続いても文意は連続性をもつとは限らない。野球の一試合は多くの離散的イニングによって構成されていて位相は非連続であるが、ルールという約束言が非連続性を一括している。継起の連続、非連続は具体的事象に即して考察する必要がある。特に因果系列が連続的か非連続的かは決定論、非決定論に通ずるだけに大きな課題である。

われわれの後の論攷にとって大きな役割を果す、事象の並進性について言及しておこう。時間作品を享受する場合、その作品の進行と観賞活動とは並進的である。例えば音楽会場で演奏される音楽の演奏時間と聴者がそれとつき合う臨場時間は並進的であり、映画の上映時間と観者の同期時間は並進的である。そして文芸作品におけるように擬似時間につき合うなら、読者の同順時間も擬似時間と並進的である（臨場時間、同期時間、同順時間については、第1章 運搬される時間情景 第3節 虚構の時間 (i) 作言の処で述べた）。図化すると、



となる。Aは作品の時間、A'が享受者の時間性、AのS~EとA'のS~Eは同じ時間帯でずれることはない。一般にA'はAに相関的であり位相の推移も相関的である。AとA'との相関性が因果的なものなのか志向的なものなのかについては後々の論題であるのでここでは論じない。

継起現象は必ずしも単線的であるわけではなく、複線的でもある。密度質はこの複線的継起を考慮に入れないと了解出来ない。例えばオペラにおいて、音楽演奏、役者の演技、歌詞、舞台装置の異質の過程が連続的に非連続的に並進して渾然一体の様相を呈している。時間の階層性、階梯性、層序性にはこのような同時並進性や雁行並進性が背景に控えていると言える。

継起質は基本的に五つの部類に分けることが出来る。

- 1) 前後性：前の，前々の，先の，先行の，先手の，後の，後々の，翌の，次の，等。
- 2) 連続性：線条的，継続的，後続的，継承的，延長の，アナログ的，連鎖的，順延的，離散的，断続的，中断的，断片的，切断的，デジタル的，隔離的，等。
- 3) 順行性：手順の，プログラムの，式次的，順路の，陳列的，予定表通りの，筋書通りの，等。
- 4) 並進性：先行の，先手の，雁行的，時差的，後行の，後手の，早番の，遅番の，対位法的，フーガ的，並列進行の，同期的，同順的，複線的，伏線的，模倣的，等。
- 5) 秩序性：順番の，順位的，交互的，対蹠的，アイウエオ順の，大小順の，級数的，階級的，因果的，羅列的，カオスの，アトランダムな，出鱈目の，手当り次第の，得手勝手な，非因果的な，等。

### IIIi 周期質（反復質）

自然現象，人間の生活現象には周期的な反復の現象が数多くある。四季の巡り，昼夜の交替，三度の食事，通勤の往復等，枚挙に暇がない。時間の直線の無限進行の表象に対して円環的の表象も根強い。永劫回帰，因果応報，輪廻の思想である。ロシア語には一回体と多回体の動詞の対すらある（прочитать と читать）。恒常的反復，習慣が時間の特質の一つであることが窺われて興味深い。

次のような言語表現がある。

循環的，反復的，一巡的，円環的，間歇的，四季的，習慣的，踏襲的，復帰的，振子の，往復の，巡回的，輪廻の，ロンド形式の，堂々めぐりの，巡歴の，等。

### IIIj 適時質

タイムリー、タイミングの英語が日本語化して久しい。野球の試合では常用語にすらなっている。ある進行中の事象に対して他の事象が交叉するか、それとも前者の事象の運びに後者の事象が有利に働く場合である。「汽車に間に合う」は前者の場合であり、野球のタイムリーヒットは後者の場合である。「適材適所」が空間的表現なら、さしづめ「適時適宜」と言ったところであろうか。偶因的で消極的な適合と意図的積極的なそれとに区別が出来よう。「千載一遇の機会」という場合は前者の場合であるが、「間を見計らって切り出す」は後者の場合である。

機会的、好機的、時宜を得た、折のよい、間のよい、運のよい、……がついている、潮時の、臨機の、時期尚早の、時を逸した、時期おくれの、遅刻の、季節はずれの、等。

機運に乗じて、機を見て、満を持して、臨機応変の、機略縦横の、機転をきかして、機先を制して、機動的に、時熟の、等。

### IIIk 緊急質

命にかかわる急患の場合、医者は順番を待っている他の患者を差し置いて優先的に応急措置をとらなければならない。平常時に対して非常時とか緊急事態の時とか言われる場合の時は、こうも言ってよければ、エネルギーが強く、エネルギーの弱い時間を排除するようである。例えば静かに読書している最中に訪問者があった場合、読書時間は中断を余儀なくされ「邪魔」が入る。訪問者が帰り際、「お邪魔いたしました」と言うが、その表現は言いえて絶妙である。訪問者は〈者〉としては「邪魔者」だが、読書時間にとっては「邪魔」が入ったのである。読書時間の中断はよこしまの「間」であって、なくもがなのものである。人は邪魔な時間に割込まれないように色々工夫して読書時間を守ろうとする。書齋に閉じこもって外的関係を絶つ。書



齋は障壁として外音を断ち、人の侵入を防ぐ、このことによって読書時間は読書時間として成立する。しかしそれでも尚、家に火事が起ればそれを消すために読書は中断される。さもないと読書そのものが不可能となる。緊急事態は強いエネルギーを示す。物理的時間のエネルギーが常に生物的時間のエネルギーより強く、志向的時間や虚構の時間のそれは弱いのか、それとも色々な障壁<sup>バリア</sup>を設ければ比較的安定して保たれるのか、それともある時間過程を強力に内部的に組織しないと邪魔な時間が割込んでくるのか、こういった時間のエネルギー、組織度の問題は今後の検討すべき課題である。

急場しのぎの、差し迫った、押し迫った、応急の、優先的な、即座の、切羽詰った、余裕のない、焦眉の、危機一髪<sup>シヤウ</sup>の、早急の、後廻しに出来ない、火急の、等。

### III 方向質

爾來、時間の流れは河の水の流れに喩えられ、そこには流れの向きがある。「覆水盆に返らず」の諺は元通りに戻すことが不可能であることを教えている。とすれば可逆の方向は不可であることになる。人間においても老人が青年に戻ったためしは一つとしてない。一つの長い文章とて逆方向から読むことは不可能である。古来より、時間には生成の方向と破壊の方向があるとされている。今一塊の大理石から一つの彫像をつくるとしよう。鉄ノミで少しずつ削り落されれば徐々に形象が浮き上ってくる。他方削り落された小片の大理石はバラバラとなり無秩序のものとなる。この意味において創作過程は破壊過程と表裏していて、しかも方向が背反しているように思える。この問題は第3章〈時と解き〉で論及するのでここでは深入りしない。

基本的には生成方向と破壊の方向の相反する二つの方向しかない。

生成的，成長的，上昇的，進化的，建設的，発展的，螺旋的，負エントロ

ピー的，等。

死滅的，衰退的，下降的，後退的，退化的，拡散的，先祖返りの，エントロピー的，等。

### III m <sup>システム</sup> 組織質

時間的対象は一つのまとまりをもって他の時間的対象から区別される。四十五分のテレビドラマと四十五分の音楽は質料的にただちに区別されるが、同じ質料からなる音楽でもベートーヴェンのものとチャイコフスキーのものとははっきりと区別される。今かりに左のスピーカーから『第五 運命』を鳴らし、右のスピーカーから『第六 悲愴』を鳴らしても、両者が融合して一つの音楽とはならないのである。『第五 運命』の演奏が一つのまとまった組織体をなしていて我が身を守り、『第六 悲愴』を受けつけない。また逆でもある。雑音だらけの古い昔のレコードを再生しても、雑音は楽奏にとけこまず、楽奏が識別されるのは、楽奏の方が一つの時間的組織体として雑音をはねのけているからである。この意味で時間的対象は相対的に独立した継起システムのいわば「堅固性」ないし「強度性」を示すのである。諸々の継起的位相の結合、諸々の並進的過程の調和、位相進行速度の同調、下部位相と上部位相の層序化、同一方向への収束、諸位相の統轄、等々が一つの時間的組織体<sup>システム</sup>を創り、外部からの攪乱を拒否する。織布が縦糸と横糸で織り成されるように、時間の織布は同時的和声と継起的旋律で織り成される。どのような模様を織り出すかは展相による。

有機的，協和的，諧和的，交響的，依存的，結合的，關係的，統括的，相乘的，協奏的，調和的，同期的，一括的，全体化的，等。

### III n 層序質

いくつかの過程が層的に並進しながらも下位過程と上位過程とが依存した

り独立したりして全体的に進展する。この場合、上位過程と下位過程とが質料上同じものと存在性格上および機能性格上異質の場合とがあり得る。例えば協奏曲なら楽音という点では同じで前者の場合である。バレエなら音楽、舞台装置、身体動作、振付け等があり後者の場合である。特に演技者の演技は力学的な因果作用（重力、回転運動力等）と不可分な関係を結んでいる。しかしすぐれた演技の場合、筋の展開、音楽の流れと演技が調和して上層の過程をかもし出し、下層の力学的因果作用は隠れて表立ってこないのである。力学的因果作用、例えば重力がなければ、バレリーナの演技は無重力状態の宇宙遊泳のようになろう。下層と上層の関係を、丁度銅貨の上に銅貨が乗るように表象するなら正しくあるまい。ただ重なっているのではなく、上層が下層に縫合されながらも、ヘーゲルの用語を用いるなら、下層が上層に aufheben（止揚）されるのである。

重層的、堆積的、重疊的、地層的、編層的、構築的、累積的、進級的、階層的、階梯的、段差的、階級的、音階的、ハシゴ段的、等。

#### IV 展相質

まとまった全過程の始めから終わりまでの推移形態であって、一部分や部分複合体の推移形態ではない。この質が成立するのは終位相が終了したその時点においてである。この展相質の主は時間的対象（過程）であって、推移位相ではない。音楽の三部形式、ソナタ形式等の楽式、小説の導入部、展開部、終結部の展叙形式、勝負の序盤、中盤、終盤の棋移は展相である。IIIのいくつかの時間質が組み合されたり複合されたりして展相質をつくることは指摘するまでもない。しかし、どの時間質とどの時間質が結合すると展相の独特の質を成すかは具体的研究を待つしかない。昔、ご飯の炊き方に「始めちよろちよろ中ぱっぱ赤子泣くとも蓋取るな」とあるが、なかなか美事な展相質の表現である。「始めは人酒を飲み、中頃は酒が酒を飲み、終りは酒人

を飲む」も味のある表現である。展相を特徴づけるために全過程を二つに分けるか、三つに分けるか、四つに分けるか等は、事象の性格に関係するので、言語的にも色々な表現が工夫されている。「めりかり」は尺八の音律の上下に、「序破急」は舞楽の三部形式に、「起承転結」は漢詩の四句形式に由来している。

以下の肯定的表現と否定的表現が目立つ。

序破急のある、起承転結の、<sup>かみしも</sup>袴をつけた、めりはりのある、起伏のある、凹凸のある、抑揚のある、山場のある、盛り上りのある、緩急をつけた、波瀾万丈の、劇的結末の、竜頭蛇尾の、紆余曲折の、首尾一貫した、拮抗した、旋律的な、筋道の通る、等。

姑息因循な、一本調子の、滔々とした、のっぺらぼうの、だらだらした、のんびんだらりとした、ちぐはぐの、中途半端の、句節のない、折り目切れ目のない、いつ終るとも分らない、行き当たりばったりの、等。

\*

\*

\*

以上述べた時間質で、時間の性質をすべて尽しているとは思わないが、抽出した基本的な時間質に変容を加えれば、欠落したところは十分に補え得ると思う。

さて以上の時間質は、後に論題とする時間価値質や時間価値を予想させるものである。しかし、時間質そのものがただちに時間価値質、特に時間価値となるかは怪しい。諺に「今日の一時は明日の二時よりも貴し」「後百より今五十」(“One today is worth two tomorrow”)とある。ここでは二つの時間質、一つは間隔質、他は時相質が問われ、時間の長さよりも現在の方が重要性をもつと言われている。このことは時間質はそれとしては単独で値打があるものでないことを物語っていよう。日本の諺では、「今日」「今」は過去や未来に対して絶対的価値をもたされている。これが現在、過去、未来の存在性格

の相違によるものか、仏教の無常思想によるものかは問われよう。しかし、時相質だけが時間的対象の性格を決定してはいない。むしろその性格を決定するのは展相質である。従って展相質の方がむしろ時間価値質や時間価値に強くかかわるものである。展相質がただちに時間価値と等価的であるかは、これまた怪しい。例えば、野球のある試合が、両チームの力が伯仲していて、その経過が緊張感に溢れ、いくつかの山場があり、美技もあり、劇的な逆転で結末がついた。この試合は展相質から見ればすぐれた価値をもっている。ところが、この試合途中で審判の判定をめぐる小競り合いがありしばらく中断した。純粋に試合を試合として考えるなら、この小競り合いはこの試合にとっては価値中和的であろう。にも拘らず、試合全体に対して、若干後味の悪さを残す。この「後味の悪さ」が享受者（観客）の主観的側面の性格のものなのか、それとも試合そのものに付随的につきまとして離れなく、試合の時間的価値にマイナスに作用しているのか。勝負の世界に fair play の精神が要求される以上、どうやら後者の場合に分がありそうである。「きれいな」試合とか、「きたない」試合とか言われる時の「きれいさ」「きたなさ」は一試合の時間価値の構成にとって純粋に無縁で価値中和的なものであろうか。“fair” そのものは少しも時間質でもないし時間的価値質でもないのに、スポーツの時間的価値にあっては何かしかの働きがあるように思われる。同じことはチョウの変身につぐ変身の一生についても言えそうである。爾来、空を華麗に舞うチョウチョウの活動は幾多の芸術の題材となっているが、卵期から成虫期までの過程全体は時間的価値として評価されにくい。それは幼虫期の推移主体たるイモムシの形態がグロテスクで時間的価値にマイナスに作用しているからであろうか。イモムシの形態はそれとしては少しも時間質ではない。フィギュア・スケートにおいて見られるように演技者の美的プロポーションは演技過程に微妙に作用する。ムソルグスキーの組曲『展覧会の絵』の原曲はピアノ曲であるが、後にラヴェルが管弦楽曲に編曲した。同じ旋律であるはずなのに、ピアノ曲と管弦楽曲とでは微妙な感じを受

けることは否めない。

以上のような現象から、展相質をもってただちに時間価値と等価におけないように思われる。誤りを犯さないためにわれわれにとって必要なことは早急な結論を安易に下さないことである。

—つづく—